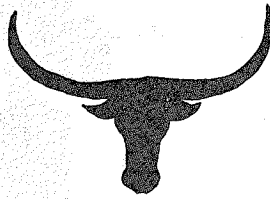


人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

- 水牛楽団のページ 2  
ワルシヤワ物語―水牛ミュージック・コンサート 3  
百年生きる、東京で 工藤幸雄 4  
ワルシヤワ歌物語―コンサートのために 6
- 楽譜  
ストラトノ(百年達者で) 13  
ワルシヤヴァイアンカ 14  
九月一日 15  
今日は会えない 16  
しだれ柳 17  
秋の雨 18
- 流れ去った悲哀―過ぎし時代の歌謡(二) 高銀 19  
ある小作人の陳述 トンバイ・トンパウ 29



水牛楽団のページ

水牛楽団は、四月二十四日を第一回に、隔月のコンサート・シリーズをはじめ。

昨年十一月と十二月に、自前のコンサートをやってみたが、うまくいかなかった。数回おい小集会のなかに「もうひとつの集會」としてわりこむことも、数かぎりないコンサートのなかに「もうひとつのコンサート」をやることも、自己満足でしかないだろう。

どんなかたちで、何をやるかについて、こんどのシリーズは、さまざまな活動をしている人たちに相談ののつてもらった。アート・フロント、全国一般労組南部支部、コジマ録音、水牛編集委員会。こうしてできた、いわば「評議會」が、企画と製作することになった。

今年度六回は、それぞれ都市、ないしは地域をテーマにしている。ワルシャワ、バルセロナ(カタルーニヤ)、サンチャゴ、コザ(沖縄)、バリ、バンコク。土地にぎざまれた歌、音楽。土地にしみこんだ血のように、そこからひきはなすことが、もはやできず、それをきけば、人びとのくるしみと抵抗の歴史がおいだされる、そんな歌や音楽が、あるはずだ。それらは、遠い土地の名によせるあこがれや、ものめずらしさではないだろう。はじめてきくときも、なつかしさをたえ、くりかえしきいたあとも、新鮮でありつづける。

いままでの、「歌」は、コンサートの中心にかいたによる「歌」は、コンサートの中心にある。そのほか、せつかくひけることだから、ピアノもつかうつもり。テーマに応じて、ゲストをよぶこともしよう。林光さんは、毎回きてくれることになった。

こんなことで、第一回は「ワルシャワ物語」と題し、ポーランドの人びとが愛する歌や音楽をあつめる。十八世紀末のポロネーズ「祖国を離れて」から、ワルシャワ蜂起に倒れた娘たちをうたった一九六九年の歌まで。パルチザンの歌、強制収容所のなかでもつくられていた歌、街角にあらわれた「禁じられた歌」

の楽団。シヨパンやシマノフスキのピアノ曲も、この抵抗精神に発し、民族の苦難にない、自由をもとめる。中世以来つちかわれた寛容の伝統は、しいたげられた歴史のなかで、しづかな表面の下に、何ものにもとらわれない幻想をささえる論理をあみだす。やがて、それが現実の力になって、世界をうごかすのだ。コベルニクスの地動説のように。

こんどの企画については、工藤幸雄さんとマヤコフスキー学院の工藤教室のみなさん、それに田村進さんに資料、選曲、訳詞の上でたいへんお世話になりました。「ワルシャワ物語」という題名も、工藤さんの著作から借りました。感謝します。

今回は、東京、長野、京都で、おなじプログラム。第二回は「カタルーニヤ讃歌」と題して、東京では六月二十五日、中野文化センター。ゲストは小原聖子さん(ギター)。東京以外の公演については未定。

ワルシャワ物語

水牛ミュージック・コンサート 第一回

4月24日(金)午後7時開演  
中野文化センター

4月27日(月)午後6時半開演  
長野県勤労者福祉センター

4月30日(木)午後6時半開演  
京都教育文化センター

司会 林光 ゲスト 水木陽子  
監修 工藤幸雄

〔第一部〕

人と水牛/白いハト/雨をまつイネ

水牛楽団

ポロネーズ「祖国との別れ」(一七九四)

M・K・オギヌスキ作曲

ピアノ 高橋悠治

ワルシャワのポロネーズ

〔第二部〕

愛はすべてを救す

オールドレン詩  
H・ヴァルス曲

秋のはじめ

M・T詩/曲

埋められた武器の子守うた

K・クラヘルスカ詩/曲

モンテカシノの赤い芥子

F・コナルスキ詩

ワルシャヴァイアンカ(演奏)

J・フイツォフスキ詩  
T・スイギエティヌスキ曲

ワルシャワ労働歌

クルジジャンノフスキ詩  
鹿地亘・訳

So lat、(百年達者で)

水牛楽団

林光のコーナ!

\*

三つのマズルカ 作品56(一八四三)

シヨパン作曲

マズルカ 作品50より1、4、7、16番(一九二六)

シマノフスキ作曲  
ピアノ 高橋悠治

しだれ柳

R・シレンザク詩

秋の雨

M・マトウシキエヴィチ詩/曲

ゴルゴタ

K・チフイエルク詩

G・グジュヌスキ曲

水牛楽団

幻想ポロネーズ 作品61(一八四六)

シヨパン作曲  
ピアノ 高橋悠治

# 百年生きろ、東京で

工藤幸雄

高橋悠治さんがコンサートをひらきたい、と電話で申し入れてきた。——ワルシャワにまつわるさまざまな歌やメロデーを中心に「ワルシャワ物語」という総題をつけるというのだ。感激であった。

数日して選曲の相談に見えた初対面の高橋さんは、眼光のするどさのかげに心の優しさを秘める芸術家とお見受けした。あれこれ音をお聞かせしたり、楽譜のある本をお貸ししたりしたあと、また数日、選曲の結果をうかがって、いつそう喜びが深まった。私たち夫婦の提案を全面的に容れてくださったのだ。

オルドンカ（ハンカ・オールドヌヅナ）の「愛はすべてを赦す」も戦争中の「禁じられた歌」のかずかずも、そしてあのワイダ監督の「灰とダイヤモンド」の最終シーンに人びとがその曲につれて踊るオギンスキ作曲のポロネーズ「祖国との別れ」も、そのあとしみじみとうたわれる「モンテカシノの紅い芥子」も、小著に譜を収めたい

ポーランドをあとにして、ここ数年のあいだに、私は「ワルシャワの七年」と「ワルシャワ物語」という二つの本を書き、家内が「ワルシャワ貧乏物語」を出した。それらのどの本のなかにも、この「百年の歌」がひびきわたっているのは、私たちの心のなかでこの歌がポーランドそのものとなって、いつもきこえているからにちがいない。

「ワルシャワ物語」のなかで、故国訪問の教皇ヨハネ・パウロ二世が、行くさきさきこの歌を迎えられたことを私は記した。

「ワルシャワ貧乏物語」の終章「花とろうそくと歌と」のなかに家内は、レストランで演奏された「しだれ柳」の歌に客のあいだから制止の声がかかったこと、同じその歌をわが家で「気を付け」の姿勢で男らしくうたったすぐあとにポーランド人のK教授が「ハンカチで、くしゃやくしゃつと鼻をかんだ」ことを打ち明けてもいます。同じ場に居合わせた私にも忘れられない経験でした。そういうことを何ひとつ知らずに初体験できたのは、むしろ幸いというべきでしょう。

「ポーランドの夏」が新しい時代の幕をあけるに至る緊張の日々にも、グダンスクでシチエチンで、またカトヴィツェで、その後も、さまざまな機会にさまざまな場所で「百年の歌」は戦う労働者、知識人、そして学生の心の底からうたわれたでしょう。グダンスク現地からのドキュメントには、「百年の歌」がひびきわたったと書かれています。ソリダルノシチ（連帯）の指導者たちのために、労働者の戦いの勝利の歌の意味合いを深めて、それはうたわれたの

くつかの歌——ことにも「ストラットの歌」も……

百年、百年、百年生きて  
百年、百年、百年生きて  
もいちど もいちど  
達者に生きて ばんばんざあい！

そんなふうに訳すこともできるこの「ストラット（百年の意味）」を、ワルシャワ生活の七年間にいくどうたい、いくど聞いたことだろう。それはたいは「名の日」の祝いの酒盛りの最中に一同起立してうたわれるのだった。荘重な調べに諧謔のこもる歌詞が妙に似つかわしく、浮かれながらもまじな気分のにじみ出るこの歌は、ポーランド人の悲しみと喜びを平等に織りませた音と調べのように思われる。

です。

「百年の歌ばかりでなく愛唱してほしい歌のかずかずを選んでくださった高橋悠治さんに、また、これからポーランドの心の歌をひろめてくださる演奏の皆さまのために「百年の歌」を高らかにうたい出したい気持ちが抑えられません。

五月にはソリダルノシチのワレサ議長はじめ代表団が訪日します。法王のときにはうたわれなかったようですが、この人たちをぜひとも「百年の歌」で迎えたいと願っています。

センチメンタルな文章になってしまったのを恥ずかしく思います。けれどもポーランドの歌を心のなかで思いうかべると、ついつい感傷的になってしまいます。それはあまりにもポーランドの、ワルシャワの悲哀の歴史と結びついているからでしょう。ワルシャワには感傷の歌がふさわしかったのです。しかし、悲歌のふさわしくない都会が世界のどこにあるでしょうか。

それはともかく、今、現実の世界でワルシャワの市民によって新しく書きつがれようとする「ワルシャワ物語」の輝かしい第一ページのために、そしてこれから白いページをうめる喜びに満ちた未来の歴史のためにも、「百年の歌」を私ほうたいたい。

（81年3月16日記）

# ワルシヤワ歌物語——コンサートのために

オギヌスキのポロネーズ「祖国を離れて」

ポロネーズの歴史は、ポーランド農民の踊りの音楽としてはじまり、やがて宮廷にはいった。「祖国を離れて」は一七九四年にかかれた。シヨパン以前のもっとも有名なポロネーズである。

一七九四年は第二次ポーランド分割の年。世界は食うものと食われるものにわけられる。ポーランドの土地の三分の二が、ロシアとプロイセンに食われた。

貴族の子として生まれたオギヌスキは、この二つの大国にたいする兵士と民衆の叛乱にくわわった。「われわれの叛乱の悲劇的結末と祖国の滅亡……わたしの心は苦悩と悲しみでいっぱいだった。音楽のことをかんがえる

したりもしなかったという意味だ。

## ワルシヤヴィアンカ

ロシア帝国によるポーランド併合の動きにたいして、一八三〇年、十一月蜂起とよばれる大きな叛乱がおこった。蜂起は鎮圧され、ロシア帝国はワルシヤワに巨大な政治監獄をきずいた。何万人もの政治犯がここに収容され、ころされずにすんだ人びとは、囚人列車でシベリアにはこぼれた。

一九七九年か八〇年、この監獄のなかで、ひとりの詩人が「ワルシヤヴィアンカ」——「ワルシヤワ労働歌」のもとになる詩をかいた。この詩はひそかに獄外にもちだされ、詩人の家の庭に瓶にいれて埋められた。

断固、掲げよう、われらの旗を

敵の嵐は荒れ狂い

弾圧がわれらをひしぎ

あすという日が不確かであろうと

ああ、それは全人類の旗

それは聖句、復活の歌

それは労働と正義の勝利

あらゆる人びとの団結の暁

余裕さえもなかった」

こうして「祖国を離れ」たかれは、西ヨーロッパの各地で祖国復興のための政治運動をつづけ、フィレンツェで死んだ。ポーランド人の悲しみと反逆の意志をこめた、いくつものピアノ曲があとにのこされた。

映画『灰とダイヤモンド』で、主人公のマチックがのたうちまわって死ぬ。エンド・マーク。あそこできこえていたのが、このオギヌスキのポロネーズである。

## ワルシヤワのポロネーズ

ワルシヤワの人たちは、自分たちの街をうたった歌がすきだ。これもそのひとつ。一九六二年につくられた。

いざや、ワルシヤワ

血の戦いへ

聖なる正義の戦いへ

進め、進め、ワルシヤワ

今、労働者が飢えに死んでいる時

快樂に溺れるのは罪悪、それは泥にまみれる如きこと

呪いあれ

若くして絞首台に登るのを恐れる者にノ

大義に命を捧げる者も

犬死にするわけではない

なぜなら我らが勝利の歌は

彼らの名を百万の人々に伝えるのだ

フラーノ、ツァーリの冠を引きはがせ

人々にいばらの道を歩ませるのだから

腐敗した玉座を血に沈めよ

人民の血で真紅に染めて

ハノ、百万の民の命を締めあげる

死刑執行人たちに、恐ろしい復讐を

ハノ、ツァーリと金の亡者どもに復讐を

実りゆたかな未来がやって来るノ

世界の国のどの町よりも

うるわしきながれるここワルシヤワ

親しい町を 去るものもなく

われらのほこり えらばれしほしよ

われらのうたう しらべはながれる

あいするワルシヤワ 親しいこの町

あいするまちよ ころのふるさと

この詩をかいたイエジ・フィツォフスキは、のちに社会自衛委員会にくわわって、労働者救援の運動をつづけている。一九七八年十一月十一日、ポーランド独立六十周年の記念日に、委員会のピラを聖ヤン大聖堂でくばり、留置された。

だれひとりこの町を去るものはない、という一行に注意してほしい。ワルシヤワはすべての人びとをうけいれる、ユダヤ人を追放

一八八三年、ようやく掘りだされた「ワルシヤヴィアンカ」は、労働者たちの手にわたった。労働者たちはこの詩を、ヴォルスキの作曲した「ズアブ兵の行進曲」のメロディにのせて歌った。ズアブ兵とは、一八六三年の一月蜂起にくわわったアルジェリア人を主体とするフランス義勇兵をさす。

こんにち「ズアブ兵の行進曲」として知られている曲があるが、それとは別の曲。

一八九〇年のメーデー以来、「ワルシヤヴィアンカ」は、労働者の歌、革命の歌としてさかんにうたわれるようになった。さらにシベリア流刑囚たちによって、この歌はロシアにもちこまれた。

ロシアの革命家グレブ・クルジヤノフスキイは、一八九七年、モスクワの監獄で同囚になったポーランド人からこの歌をおそわって、ロシア語に訳した。ロシアの革命家たちもこの歌をうたうようになり、やがて世界中にひろまっていった。

クルジヤノフスキイは、もとの詩を「プロレタリアートの世界観にあわない用語をすて革命的内容をもって」訳した。もとの「ワルシヤヴィアンカ」は、のちに流布したものは詩と曲もすこしちがっている。

## ワルシャワ労働歌

日本に「ワルシャヴィアンカ」がたえられたのは一九二八年である。前衛芸術家同盟が「ワルシャワ労働歌」として紹介した。プロレタリア文学者の鹿地亘が訳した。

暴虐の雲 光をおおい

敵の嵐は荒れくるう

ひるまず進めわれらの友よ

敵の鉄鎖をうちくだけ

自由の火柱 輝やかしく

頭上高く燃えたちぬ

今や最後のたたかいに

勝利の旗はひらめかん

起てはらからよ 行けたたかいに

聖なる血にまみれよ

とりでの上にはわれらの世界

きずき固めよいさまし

## ストラト (百年達者で)

アンジェイ・ワイダの『大理石の男』で、釈放されたビルクトが工場に戻ってくる。町は変り、妻は行方不明。疲れはてたかれを

むかえる集会で、この歌がうたわれた。かれは花束を押しかえし、外にでる。

薄暮の石畳を歩くビルクト。工場からの歌声がかさなる。

「百年 百年 達者に生きて  
もうひとつ百年 達者に生きて」

あるいは――

一九八〇年八月十四日、グダニスクのレーニン造船所の労働者たちは、二千ズロチの賃上げをもとめてストライキに突入した。同十六日、自由労組結成。ストライキ委員会の委員長ワレサが交渉中の会議室からでてくる。このときも、あつまつた数千人の労働者たちはかれを胸上げし、口々にこの歌をうたつたという。

「ポーランド人社会に暮らすには(国歌)の文句は知らずともすませるが、ストラトだけはぜったいに歌えなくてはいけない」と、工藤幸雄の『ワルシャワ物語』にある。

「誕生日や(名の日)の祝い、ともかくめでたい折に公私にかかわらず、しらふでも酒が入っても歌われる壮重かつ明朗かつ素朴な調べである。かんたんきわまる文句だ。すぐに

覚えられるから心配するには当たらない」

したい人たちの長寿をいのる。くるしみがどんなに長くつづこうと、百年も二百年も生きつづけるのだ。われわれが生きているかぎり、ポーランドが減びることはない。

## シヨパン 三つのマズルカ (作品56)

フリデリク・シヨパンは一八一〇年にワルシャワで生まれた。少年時代にマゾフシェ地方に旅行し、マズルカやポロネーズなどの民族音楽につよくひきつけられた。

一八三〇年、ワルシャワ音楽院を前年に卒業したシヨパンはウィーンにゆき、そこで十一月蜂起のニュースに接する。蜂起の潰滅を知つたのはシュトゥットガルトにおいてだつた。「腕ぐみをして、ため息をつき、悲しみをピアノにむかつてはきだすばかりで、氣も狂いそうだ」

一八三一年、パリ到着。それから一八四九年の死まで、この地で亡命者としての死がつづく。三つのマズルカ(作品56)は一八四三年にかかれた。

マズルカはもともとはマゾフシェ地方の民衆の踊りである。おなじ三拍子とはいっても、

土地によつてさまざまなちがひがあり、シヨパンはそれを、中くらいの速度のマズルカ、急速なオベレク、ゆつくりした速度のクヤヴィヤクの三つに分類し、それにもとずいてたくさん曲をつくつた。

## シマノフスキ 二十のマズルカ (作品50)

シヨパンが平地の民の音楽からきたえあげたマズルカのかたちを、シマノフスキは山岳地方の民謡に投影させた。

タトラ山麓の町ザコパネとその周辺には、その昔、自由をもとめて山にたてこもり、封建領主に抵抗した山の民の民謡や踊りがのこっている。シマノフスキはこれらの音楽に心をひかれ、ノートをとり、それにもとずいて一九二六年に「二十のマズルカ」(作品50)を作曲した。

たたかう山人たちの伝説をもとにしたオペラもつくつた。「私は山の民を非音楽的であるとする見解につよく反対する。かれらはポーランドの農民のなかでも、きわめてすぐれた芸術家なのだ」

かれは一八八二年、ウクライナの貴族の家に生まれた。一九〇一年にワルシャワ音楽院

入学。やがて仲間の音楽家たちとともに「若いワルシャワ」の運動をはじめる。シヨパン以後、いつのまにかローカルな存在になつてしまつたポーランド音楽をよみがえらせなければならぬ。そうかれらはかんがえた。

シヨパンは民族的音楽という課題に正しくとりくんだ、とシマノフスキはいう。

「だからこそシヨパンの作品は国境をこえて理解されたのだ。みずからの民族的特性をもちながら、ヨーロッパ文化の最後水準にまでたつする、という意味で、かれはポーランド音楽の最高のシンボルである」

## 愛はすべてを赦す

シマノフスキが「二十のマズルカ」を発表した八年前、ワルシャワのキャバレット「スフィンクス」で、ひとりの歌い手がデビューした。ハンカ・オールドヌヴァである。オールドヌカという通称でしされた彼女は、兩大戦間のポーランドにおけるもっとも有名な歌手になつた。

ルプリン、クラクフ、ヴォルノ、ルボフなどの都市をまわり、一九二〇年代のはじめには、ワルシャワの「キ・プロ・コ」(とりち

がえ)という店でうたつていた。

愛はあなたのすべてを赦し

哀しみは笑みに変わる

愛はすべてをいいわけする

欠点を 嘘を 涙を

たとえ絶望にうちひしがれて

恐しい女 意地悪な女と嘆こうと

愛はあなたのすべてを赦す

だつて愛つてこの私ですもの

私みたいに激しく 気が狂うほど

底の底まで愛してくれているのなら

裏切れるものかしら

いったいどこで

彼女の歌いぶりはいへん個性的だつたので、ちいさい店で長期間うたいつづけるといふよりも、劇場でのリサイタルのほうがよかつたらしい。悲劇的とおもわせてつぎはコツケイ。彼女はそのつど、あたらしい、意表をつくパーソナリティを身にまとい、人びとのまえに登場した。

歌い手としての彼女の人生は、ドイツとの戦争がはじまると同時に終わった。声がなくなつてしまつたのだ。

## 秋のはじめ

これもオールドンカの歌のひとつ。声をうしなつた彼女は、うつくしく異様な絵をかきはじめた。

戦争がおわつた。一九四六年、彼女はソ連からインドへおくりられるポーランド人の子どもたちにつきそつて、インドへいった。その後にはポーランドにもどることなく、一九五二年、ペイルトで肺結核のために死んだ。

## 埋められた武器の子守うた

一九四四年八月、ワルシャワ蜂起。市民たちはみずからの街をドイツ占領軍からとりもどすために武器をとり、六十三日間にわたるはげしいたたかひのすえに敗れた。蜂起の最初の日、クリステイナ・クラヘルスカという三十歳の女性が戦闘のなかで死んだ。

ワルシャワの街をながれるヴィスワ河のほとりに、両手に剣と盾をもつた人魚のブロンズ像がある。人魚はワルシャワ市の紋章である。この像が一九三九年にたてられたとき、モデルになつたのが当時二十三歳、ワルシャ

ワ大学の学生であつたクリステイナだつた。彼女はたくさんの詩をかき、それに曲をつけた。

悲しみの河、月は河面を流れる  
岸には一本の楓が暗い手を垂れて  
眠れ子よ、何の物音もない  
眠れ、塚に埋められた武器よ

悲しみの河、蔭濃い森は眠つた  
銀いろの星たちは銀の淀みに落ちた  
いずこか野に、霧ぶかい野のいずこかに  
埋められた武器は油断なく眠る

悲しみの河、月は河面を流れ過ぎ  
暗い夜の木々の葉に手を置く  
眠れ子よ、兵士の眠りを眠れ  
もうじきにわれらは武器を目ざめさせよう

埋められた武器はめざめさせられた。彼女がつくつた歌は、ワルシャワ蜂起のなかで、市民たちのあいだにひろまつた。各地の牢獄につたわり、国外にまでながれていった。しかし「その作者が蜂起の第一日に倒れた女性であることをほとんどの人びとは知らなかつ

た、まして彼女が人魚像のモデルであつたことも「ワルシャワ物語」

## モンテカシノの紅い芥子

イタリア中央部モンテカシノの丘にたてこもるドイツ軍に、いくども総攻撃がころみられた。ついにポーランド人の部隊が山頂をうばい、白と赤のポーランド国旗が風にひるがえつた。

軍団の兵士劇場の一員として、このたたかひにくわつていた作詞家のフェリックス・コナルスキが、ただちに詩をかき、それに仲間の一とりが曲をつけた。一九四四年五月のことだ。

モンテカシノの紅い芥子は  
霧の代りにポーランドの血を吸つた  
その芥子を踏んで行き兵士は斃れた  
だが死よりも怒りはより強かつた  
年月は去り世紀はすぎるだろうが  
遠い日々はきつと残る

そのときモンテカシノのすべての芥子の紅は  
濃さを増すだろう、ポーランドの血に育つ

ただのだから

見えるか、ずらり並ぶ白い十字架が  
あれは名譽を選んだポーランド人だ  
行くんだ……もつと遠く……もつと高みへ  
行けば行くほどその数はふえる  
この大地はポーランドのものだ  
たしかにポーランドはここから遠いが  
自由とは……十字架の数で測るものだから  
歴史のもつ一つの誤ちはこれだ

これも『灰とダイヤモンド』のなかにでてきた。女性の歌手が小さいな舞台でこの歌をうたつていた。

## 明日はワルシャワ

ポイチェツク・ムウイナルスキが一九六九年につくつた。ワルシャワ蜂起をうたつた歌で、『ワルシャワを歌う唱歌集』におさめられている。

あの娘たちは蜂起をたたえた  
けれども自分たちのことは語れなかつた  
倒れるときには静かに倒れた

まるで麦の穂のように  
生きていけば明るい髪に花を挿すだろう

あの娘たちは蜂起をたたえた  
けれどもあのころ、髪に花はなかつた  
倒れた娘たちには栄ある名がかぶされるだ  
ろう

生きていけばワルシャワに戻ってくる  
ことだろう  
ワルシャワはあそこに もとのとおりにあ  
るのだから

ワルシャワに行こう

戦争はわれわれを世界中に散らばらせた  
しかしわれわれはお互いを見いだすだろう  
やがて大地に頭をたれ  
破壊された敷石に立ち  
われわれは歌うだろう  
あの一九四四年の娘たちのように  
また再建のときがくる  
愛のときがくる

人びとは誇り高く頭をあげ  
新しい日が生まれでる  
ワジェンキ公園では色鮮かな若葉が燃える  
今日われわれの前にひろがるのは見知らぬ  
土地

けれども明日はワルシャワ

## 九月一日

ポーランドの都市にはいつも辻音楽師たちのすがたがあつた。かれらのすがたはドイツ占領下のワルシャワからも消えなかつた。かれらはアコーディオン、ヴァイオリン、ギター、トランペットなどの楽器をもち、古い流行歌のことはヒトラーを諷刺し、占領政策に抵抗する内容のものにかえて、広場や街頭でうたつた。これらの歌は「禁じられた歌」とよばれた。「九月一日」もそうした歌のひとつだつた。

替歌だけではなく、地下レジスタンスの運動のなかから、あたらしい歌も生まれた。これらの歌も辻音楽師たちによって街頭でうたわれた。

占領によつて解散させられたワルシャワ・フィルやオペラ劇場のメンバーも街にでた。かれらは広場で巡回コンサートをしらき、ポーランドの音楽を演奏した。そこにもおおくの「禁じられた歌」がふくまれていた。もちろん占領軍の弾圧はきびしかった。ゲシュタポは音楽家たちを逮捕し、つきつぎに

強制収容所へおくりこんだ。ポーランド愛国歌をうたったというだけで、子どもたちまでが殺された。

しかし「禁じられた歌」は死ななかつた。耳から耳へ、また、あちこちで八ページだての小歌集が印刷され、ひそかに手わたされていった。それはバルチザンたちの大切な宣伝手段になった。

### 今日は会えない

これも「禁じられた歌」のひとつ。替歌ではなく、マギエルスキが詩をつくり、クルルが作曲した。街頭のコンサートでさかんにうたわれていたという。

### しだれ柳

地下レジスタンスの兵士たちは、かすある抵抗歌のなかでも、この「しだれ柳」がいちばん好きだった。

一九三七年、ある下士官養成学校の音楽教官だったロマン・シレンザクは、「軍歌として長くのこるものを」という学校当局の委嘱におうじて、この詩をかいた。かれはワルシ

ヤワのヴィスワ河畔にそだった。川岸にはしだれ柳がおおかった。

曲はどうするか? 「スラブ女の別れ」とロシアのオーケストラ曲を見つけた。かれはその第一部をすこし手なおして、そのまま利用することにした。

もとの曲をつくったのはワシーリー・イワノヴィチ・アガプキンというロシア人で、軍隊のラップ演奏者から指揮者になった。レーニンの葬式で、葬送行進曲の指揮をとったのがかれだった。

ロシアのバルチザンたちも、この曲に別の歌詞をつけてうたっていた。一九四四年三月に、ソ連とポーランドのバルチザンたちが国境のブク川で合流したとき、かれらはおなじ曲で別の歌をと、にうたった。

### 秋の雨

これも「禁じられた歌」のひとつ。

### ゴルゴタ

占領下のポーランドでは、おおくの作曲家や演奏家が音楽家同盟にあつまり、公然・非

公然のコンサートをおこなっていた。こうした活動にささえられて、強制収容所のなかでも「音楽の夕べ」が組織され、あたらしい歌が生まれた。

私のゴルゴタよ、かたい岩よ

お前の胸は毎日いくどとなく張り裂ける夜が明け、のぼる太陽がお前をあたため月が牧場の花の香りをほこんだ丘のまわりでヴィスタク河の水がわきでるよ

そしてポーランドの大地を鋤で耕すように丘にむかってやせおとろえた手がたえずさしのべられるいつ自分の家に帰ることができるとのか

見知らぬ灰色のドナウ川をこえ

東の方向へ歌が流れていく

お前を、私の故郷をあこがれる歌が

私のボズナンよ、ワルシャワよ、ルブリ

ンよ

私の祖国よ

この詩をかいたコンスタンティン・チフィエルクは一九九六年生まれ。一九三八年にポ

ーランド文学アカデミー銀賞をうけた詩人である。一九四四年、解放を待たずにグーセン強制収容所で死んだ。

作曲はグジヌスキで、流行歌手だったタデウス・フアリチェフスキやバルトンのユーゼフ・グルシチニスキによって、グーセン収容所でうたわれはじめた。

強制収容所でつくられた歌は、一九七五年までに、三十四カ所から五七〇曲があつめられた。これらの歌は「一人だけの嘆きであつたり、三、四人の信頼できる仲間とうたう歌であつたり、あるいはナチ親衛隊員の監視の目をくぐって、夜ひそかに収容棟でうたわれる合唱であつた」と、田村進がポーランド音楽史でかいている。「特に合唱は連帯と、生きる力と、抵抗の強力な武器となった。ソロの歌詞と旋律は紙片に書かれ秘匿されていたものもあつたが、替え歌も多く、歌詞は記憶に頼っていた」

### シヨパン 幻想ポロネーズ (作品61)

一八四五年の秋から翌年の夏にかけて作曲された。後期の代表作で、生前に出版された最後の作品である。

## Sto lat ! (百年達者で)

Sto lat sto lat niech żyje żyje nam sto lat sto lat  
st ɔ ɫat st ɔ ɫat ɲɛx ʒɨjɛ ʒɨjɛ nam st ɔ ɫat st ɔ ɫat  
niech żyje żyje nam jaszczɛ raz jaszczɛ raz niech żyje żyje nam  
ɲɛx ʒɨjɛ ʒɨjɛ nam jɛʂtʂɛ raz jɛʂtʂɛ raz ɲɛx ʒɨjɛ ʒɨjɛ nam  
ɲɛx ʒɨjɛ nam

百年 百年 達者に生きて  
百年 百年 達者に生きて  
もひとつ百年 達者に生きて  
ばんばんどあい

9月1日



- 1 きいておくれ つらい話  
こらえきれず あふれる歌  
物語は かなしいもの  
みなさまには お許し願う
- 2 忘れもせぬ 九月一日  
敵はおそった わがポーランド  
打ちのめされ 血にまみれた  
愛する町 わがワルシャワ
- 3 美しかった 町もいまは  
変りはてた がれきの山  
家はやかれ 病院もなく  
傷ついても ゆくあてなし
- 4 爆弾がおち パンは足りず  
人は倒れ 飢えて死んだ  
爆弾はふる 朝も夜も  
水はかれて 火を消せない
- 5 教会もなく 家もやかれ  
どこにやろう 飢えた子らを  
子をもとめて さまよう母  
敵を呪い 神に祈る
- 6 あわれワルシャワ がれきのなか  
降伏より 手だてなかった  
防衛戦が 三週間も  
あとは神が 悪をこらす
- 7 願いごとは 限りもなく  
物語は これで終わり  
建てなおそう ポーランドの  
山も河も われらの手で



**Wszystkim**  
J. P. Kowalewski  
All praise is due to God  
The Father, the Son,  
and the Holy Spirit,  
who sits at the right  
hand of the Father,  
who is with the Father  
and the Son, who  
together with the  
Father and the Son,  
is worshiped and  
glorified together,  
for ever and ever.  
Amen.

**Wszystkim**  
J. P. Kowalewski  
All praise is due to God  
The Father, the Son,  
and the Holy Spirit,  
who sits at the right  
hand of the Father,  
who is with the Father  
and the Son, who  
together with the  
Father and the Son,  
is worshiped and  
glorified together,  
for ever and ever.  
Amen.



# しだれ柳

- 1  
しだれ柳はざわめき 娘はむせび泣く  
ぬれた瞳に映るは 兵士のつらいきだめ  
ゆれるな柳 胸がいたむ  
泣くのはおやめ パルチザンも楽しい  
おどりの合図 武器のひびき  
恐れも知らず 刈りとられるいのち
- 2  
雨にもあつい日ざしにも  
いつも歩調そろえ  
森の戦士は進むよ あかるい歌とともに  
ゆれるな柳……
- 3  
はてしなく道はつづく  
どこまであるのか  
勝利の日を待ちながら 涙と血は流れる  
ゆれるな柳……

# 今日は会えない

- 1  
今日はこられない 夜霧に消える  
うしろ姿を 追わないでくれ  
今宵の宿は どこになろうと  
そこでぼくをまつ 森の仲間が
- 2  
月はもう沈んだ 犬の遠吠え  
きみと別れても 思いはのこる  
いつかかえれたら いつものように  
あつい口づけで むかえておくれ
- 3  
かえないときは 仲間が春に  
ぼくの灰をまき 骨は苔むす  
たずねておくれよ 草原にいつか  
麦の穂に変わって 生きてるぼくを  
麦の穂に変わって 生きてるぼくを

# 秋の雨



1 秋の雨 かなしい歌

銃はぬれ 鉄かぶとはさびつく  
泥にまみれ 涙にぬれ  
背のうの下をぬらした十八歳

2 遠い町に 夜がくる

いとしい娘が眠りにつく  
今日もまた 夜霧みつめ  
きみの無事を祈ったことだろう

3 秋の雨 かぶと鳴らす

どこか遠くへ きみは消える  
いつかまた かえる日に  
あの子を抱いて 寝かすつけよう

# 流れ去った悲哀(二)

— 過ぎし時代の歌謡

高<sup>コ</sup> 銀<sup>ウ</sup>

キムギョニンシク  
金慶植訳

# 死の賛美

その海に歴史の痕跡は見えない。東海から東支那海にかけて吹きつける冬の雨、波はその雨に濡れていた。玄海灘である。しかしこの玄海灘に歴史が見えないからとて、玄海灘が何も語らないからとて、玄海灘はこの国の恨という記号の感嘆符をつけずには語れないところである。

「玄海灘」の作家李炳注の小説「閔釜連絡船」は、こういった「玄海灘」の歴史が書かれている。「閔釜連絡船は栄光の象徴でもあり、屈辱の象徴でもある。……栄光だとか屈辱だとかは、日本人には栄光で韓国人には屈辱であるというふうには区別したくない。……たとえば韓日合併に功労があつて爵位を得、財を成している韓国

人にとっては栄光の通路であり、貧困のあまり大陸地方に売られていく娼婦にとっては、それが日本人であるときは、ひとつの屈辱の通路である」という玄海灘客観論があるにせよ、この国の「玄海灘の知識人」の意識のなかには深い傷あとのかけりがある。この海のまんなか、沖の海で尹心憲は心中した。

一九二六年八月五日付の「東亜日報」は「玄海灘の激浪のなかに青年男女の心中——劇作家と音楽家が一束の花となり、世俗から離れ、花のない水の世界に」という特ダネを載せている。

「去る三日午後十一時、下関釜釜山に向かう閔釜連絡船徳寿丸が、四日午前四時頃、対馬島沖にさしかかったとき、いきなり洋装の女性と中年の男性が抱き合つて甲板から海に身を投げ自殺した。すぐ船を止め、付近を搜索したが死体は見つからず……男は全南木浦の金水山(30)、女はソウル西大門一丁目七三の尹水仙(30)で……」

この記事は当時の社会面を賑わし、四日間も速報扱いにされた。

この事件によつて尹心恵の挽歌「死の賛美」は、全国を「応漢とした荒野に、むせび泣く人生……」の虚無主義におとし入れてしまふ。そして韓国最初の劇作家金祐鎮と韓国最初のソプラノ歌手尹心恵の悲恋とともに、この歌は「ああ生きても一生、こう生きても一生」の悲恋の主題歌として一九二〇年代の暗鬱とした絶望の世界を極彩色でいろどつた。

また、この歌は国内はもろろんのこと、満州、日本へと流れていきながら、この国の流民たちに悲哀と苦悩をかみしめさせ、植民地の青少年に恋愛の極意を教えこんだ。

恋愛を悲劇で完成し、恋愛に彼ら自身の恋愛主題歌を持つこの華麗な情死事件は、三・一運動の憤怒が挫折した灰燼の地の上にどす黒い血の痕跡として伝わっていった。

近代史開幕以後のこの地は、虚無がはびこるためにもつてこの状況であつた。国粹主義者が亡命し、親日分子のさばりはじめた絶望の社会、そこにはどうにもしようのない奴隷的哀愁が生まれつついたのである。

そして一九二〇年代の文学「白潮」「廢墟」は頹廢主義を止揚し、この国の歌は亡国のエレジーから「死の賛美」へと移つていった。

もちろん金祐鎮、尹心恵の挽歌は、かならずしもその当時の社会状況のなかでの流行のきざしとしてみるにはすし無理がある。なぜなら彼らの個別意識を同時代の主体意識として誇張される危険があるからである。だが、なぜこの歌が、いつときの官能的情死の残した歌が、近代歌謡史の一ページを大きく飾つたかということを追求めてみると、歌はいかに社会のもつとも正直な肉声であるかと

をはじめ「華麗なる門」「最後の拍手」などを公演した。

「東亜日報」は、彼女の恋を八年間にわたる燃える恋といつてゐるが、実は五年が正しい。

このとき、彼らは芸術至上主義的な雰囲気でも、身も心も燃えたときの歓楽に身を投じていた。

仏教僧侶である柳葉(72)は「その当時彼らは多くの非難にもかかわらず、尹心恵の自由奔放な情熱のとりこになつていて大胆であつた」と。金祐鎮は日本の作家有島武郎を崇拜する早稲田大学文科の学生であり、木浦の百万長者の息子であつた。現在、彼の弟である金益鎮は、呉経熊の「東西の彼岸」を翻訳した老天主教徒として三徳洞に住んでいる。

尹心恵は、この富豪の息子であり既婚者である金祐鎮を完全に恋のとりこにしながらも、他にいろいろと艶聞をふりまいてゐた。彼女は平凡な音楽生活や京城女高普付属校の教員生活をしながら生きていくという女ではなかつた。彼女は後期土月会に入つて演劇をしたこともある。ソウル団成社近付の授恩洞六〇(鳳翼洞六〇)にある奥田写真館の一室を借りて、金・尹の乱れた同棲生活ははじまつた。市内敦義洞七の崔鐘鉉(70)老人は「そのときの尹心恵をみたことがありますよ。実にカッコよかつた」といつてゐる。

彼女はその当時、つばめレコード会社ソウル文芸部分室にいた土月会同人李瑞求の連絡で、大阪レコード吹き込みに入った。もちろん何回も別れたことはあるが、彼女の恋人である金祐鎮も悲壮な決心をして同行した。そして「マギの追憶」「麗しの女」「僕と君」「ああ、それが恋なのか」「母は呼ぶ」「望郷歌」「微笑する月桂花」など十

いうことがわかる。

イワノフの「ダニユーブ河のさざ波」は、ゆるやかなワルツ曲である。尹心恵の歌詞さえそこにのらなければ、中欧のワルツ曲のゆるやかな哀調の曲にすぎない。しかしそれが「死の賛美」の曲になつたとき、それは初期植民地社会の暗さをこめた悲歌に変わる。

また、この歌は玄海灘に投身自殺したという事実が、韓半島と日本との関係を反映させる。一九〇五年の壹岐丸、一九〇八年の薩摩丸、一九一一年のうめか丸、一九一二年の弘済丸、高麗丸、新羅丸、一九二二年の景福丸、徳寿丸(尹心恵の船)、一九二三年の昌慶丸、一九四〇年の金剛丸、興安丸、一九四一年の天山、崑崙丸が、千五百トンから七千五百トンと大型化していった。はじめは朝鮮と植民地の踏台として満州の興安嶺、中国の奥地ヒマラヤまで征服しようとする日本の誇大妄想的野望をあらわすこれらの船名は、そのままこの国の日本化政策を意味していた。

このような玄海灘に、開化後期の悲劇的な女の死は、それだけその女の悲歌を超越するものにした。

尹心恵は一八八九年平壤で生まれ、平壤の崇義女学校、平壤女子高等普通学校(旧制中学校)を経て京城(ソウル)女高普師範科を卒業、一時は江原道の片田舎の先生をしたこともある。そのあと官費で日本上野音楽学校に留学し、声楽を学んで帰国、一九二〇年代には洪蘭坡、金永煥、韓琦柱、金亨俊たちと音楽活動をした。

彼女が日本にいた一九二一年、東京の留学生たちは、黄錫馬を团长とする故国巡回演劇団同友会を組織し、金祐鎮、柳葉、洪海星、洪永厚らと帰国して、金祐鎮の脚本・演出による悲劇「金永一の死」

曲を吹き込んだ。そしてそのあと、彼女は姉の尹聖恵のピアノ伴奏で「死の賛美」を追加して吹き込ませた。

風俗学者の李瑞求氏は「……死の賛美」は尹嬢が強引に吹き込んだ。お金はいらないからといつて。それじゃというんで日本人はわけもわからず吹き込ませたもの」だといつてゐる。

彼女は金祐鎮の家族の反対、彼らの同棲生活の絶望、イタリイ留学の挫折のために、姉の聖恵の米國留学を横浜で見送つてから、金祐鎮と下関で徳寿丸に乗つた。そして彼女は金祐鎮に心中を強要したのである。

彼らは玄海灘で彼らの悲恋に終止符を打ち、彼女のうたつた彼女の挽歌は、この地の一時期を吹きまくつた。「あなたたちのいくところ、山か海か、私には山も海もいらぬ」という遺書を船長と家族に残した彼女の情死は、この地に永く伝説を残した。

だが、玄海灘にはこの情死に先立つて「隆熙三年十二月十九日……その船が対馬島沖にさしかかったとき……二十代の日本留学生である元周臣の投身自殺がある。日本にいる悪質売國奴業乗鞍を誅殺しようとして失敗し「面目ない」目的を達し得ず」として自殺した。その本名はいまもつてわからずじまいである。

このような歴史に、尹心恵の「死の賛美」は情知的なひとつの悲劇であつた。「金も名も愛もいらぬ」という浅薄なくりかえしにもかかわらず、それは一九二〇年代の社会意識のパターンをあらわす自虐、自棄の暗い涙であつた。その冬、玄海灘はしかし偉大である。この国の悲劇、またはひとりの女の悲劇のようなものはみな消し去り、青黒い玄海のみはいつでも波うつてゐた。

## 鉄道歌

音たかく 鳴りひびく 汽笛の音  
南大門を 背にして 走り出せば  
それは あたかも 疾風のよう  
翼のある 鳥さえ 追いつけず

老いも 若きも 仲よく座り  
われらも 外国人も ともに乗り  
内外親善 みんなも 和やかに  
小さい 別世界 くりひろがるよう

우렁차게 토하는 기적소리에  
남대문을 등대고 떠나나가세  
빨리부는 바람의 형세같은니  
날개가진 새라도 못따르겠네  
높은이와 젊은이 석겨안졌고  
우리네와 외국인 갖이 탕으나  
내외친선 다같이 익히디나니  
조그마한 만세상 절로일윳네

長いあいだ、わたしたちは鉄道を通じて離別のつらさ、旅愁、生きることのつらさ、そして何よりも流浪の悲しさを味わってきた。鉄道七十年史は、偉大な徒歩旅行者である元暎、義湘、慧超そして金笠とはちがい、自分の住んでいるところから離れたことのない人たちにとっては「旅行と流転の風雲をつつんだ土着社会変動史」であった。道とはやつとあの峠を越え消えていくものだとしか考えていない農業の聚落体制では、それはもつとも驚くべき開化機能をもつていた。

ここからどこかへ行くという事実、ここからはるか遠いところがあるという事実は、汽車が汽笛を鳴らしながら走っていく風景と相まって、哀歎の入りまじった運命的な旧怨となったのである。まさにそうだ、幼いときの母のためいきと「汽車は発つていく 霧雨ついで……」という悲しい歌で、われらはすでにこの地における生と真実を悟つたのである。別れなくしてどうして人間の生を知り得ようか。東仁川一帯には煙がいつぱいたちこめていた。その煙は「早く来て、ごはんを食べなさい」と呼んでいる故郷の夕餉の煙ではない。仁川公団の重工業、一船工場が競って吹き出す煙である。西海の干潮の風をも止める勢いである。

一八九七年三月、アメリカ人モールズが、軌間英呎で五呎の高宗政府鉄道規則によって、この仁川の牛角岬で京仁線起工式を行なった。この起工式の七カ月あと、朝鮮は大韓帝国と改号され、皇帝の即位式があった。東学革命、断髮令を体験した傾国政権の、日本統監政治直前の儀式である。そのあとシベリア鉄道と計った四呎八吋五分にと鉄道規約を変え、一八九九年九月十八日、仁川と鷺浪津間

## 光州よ、永遠に！

尹伊桑・高橋悠治作品コンサート

5月20日(水) 午後7時開演

日比谷公会堂

### 尹伊桑作曲

○範例——光州よ、永遠にノ

○夜よ ひらけ(ネリー・ザックス詩)

ソプラノ独唱・清水邦子

### 高橋悠治作曲

○光州から

○韓国抵抗歌集 歌・李政美

青鳥(全羅道民謡)

歲月이 오며는(金大中・詞)

臨終(高銀・詩)

東京ステイ・ファイル

指揮 高橋悠治

問い合わせ コンサート・エージェンシー・ムジカ

(〇三) 四六一・二五九〇

主催 韓国民民主化支援緊急世界大会文化委員会

の三三・二キロメートルの京仁鉄道が開通された。これが韓国鉄道史の第一歩である。

渚物浦斗角里(いまの昌栄洞)は、いまはゴミゴミした貧民村だが、十九世紀末には荒涼とした空地であった。この牛角岬をおりていくと、そこに京仁線の始発駅が中区仁岬洞一(新龍洞)にあったが、いまは青果市場になっている。このもとの駅から仁川港に向つていったところが、いまの東仁川駅である。また中区松鶴洞二街一八にある古びた洋館が、まさにあの京仁鉄道施設権を得て最初の起工式を行なったアメリカ人A・B・モールズの住んでいた家で、郭尚勳氏の所有から、いまは崔啓隆氏のものになっている。

中区柳洞二に住んでいる韓在俊老人(80)は「十五、六歳のころ、よく牛角岬に登つては仁岬洞駅からソウルに向う汽車を毎日のように眺めていましたよ。ですが、私のようなものは一度も乗つたことはありません」と語ってくれた。

開通当時の旧式機関車は、角ばったタンク型であったが、そのあと植民地線路の京釜線、大陸軍用鉄道である京義線と民間の三流交通網である湖南線、京元線などがバルチック型、タウ型、ミカ型、パシ5型特急機関車へと発展した。牛角岬から漢江の鷺浪津までは南大門駅(ソウル駅)、終着駅の西大門駅に至る漢江に、鉄橋がかかっているのは臨時運行をしていた。「機関車4、客車5、貴賓車1、貨車25」が韓末鉄道の初の編成だが、いまでも渚物浦、西大門(南大門)までの運輸機関の足跡をたどりながら「……車内は三等までの区分はあるが、ガラス窓は風を防ぎ、椅子は心地よく、便所まで備わっていて……いつの間にか仁川につくと、日本館、清国館が山腹に高

くそびえ立ち、海には船が煙を吐きながら行き交い、マストは林立し……」といった観光への誘いと、ソウルと仁川間の一日交通圏を強調する京仁鉄道合資会社の「汽車勧告文」までが、啓蒙の役割を果している。

朴定陽の「美俗拾遺」と、渡日使節たちのいう汽車が、一八八九年駐米署理公使李夏榮によって、模型で紹介されたあと、その汽車がこの地に施設されるまでには、外国鉄道技師の殺害事件、乱動、激烈な反対にあっている。それは近世風水説と祖先崇拜思想、または民間の精神史に位置する土着説などが、いかなればその地脈が切れることを恐れたからである。蒸魚は亡国の風潮だとして開化思想の反対論を、保守階級の知識人たちとともに、民間社会はつくりだしていった。

特に鉄道施設のための墓地移動、村家の撤去、農地の買収問題、それに鉄道施設責任者と人夫の横暴などのために、殺傷事件はひっきりなしにおきていた。

しかし、いったん京仁線が開通すると、京釜線をはじめ韓半島の鉄道網は、この国の交通文化に大変革をもたらしたのである。

鉄道初期の一九二〇年四月十九日付の新聞は、すでに「……旅客便の不平の多いなかでも、京義線と京釜線は外国人や日本人が多く乗るので、改良もし、親切でもあるが、京元線と湖南線はほとんど朝鮮人だけのせいも改良もされずに……」と、鉄道の民族差別問題をにしている。「雨降る湖南線」の雨は、すでにそのときから芽生えたようである。

鉄道は侵略の大道だと非難し、この国の国道を一・二メートル幅

家)がよくうたう「クントク クントク 越えていく平壤駅」は、まさにこの歌である。

この鉄道歌は、いままでも開化歌詞をつくるパターンとなってきた社会が、このときから特定の啓蒙知識による専門的な歌詞を生むものへと脱皮していくことを、韓末の開化思想が担わなければならぬ各層の思惑が、開化をどの程度うけ入れはじめたかということも教えてくれた。ソウル初期の苦学生たちが、空腹をまぎらすために、この歌を大きな声でうたったとも伝えられている。

いずれにせよ、この歌は開化の実況として、鉄道網とともにこの国の老若を問わず、非常になじみ深い歌になっていった。言論人である洪鐘仁氏も「私もよくこの鉄道歌をうたいましたよ。歌は国土認識を新たにし、世界認識を生む」といっている。

こういう歌とは反対に、鉄道文明に対する否定も、そのときの民謡にあらわれている。「畑はなくなつて道となり 家は壊されて 駅になる」や「洛東江七百里 コンクリート敷き ハイカラ野郎のさばる」などの辛辣な社会反応に転化することもある。この国の近代は、このような近代化の試練から開幕したのであった。

鉄道生活三十年を送った朝鮮鉄道史工務分科編集委員(一九三七年)であり、前交通部長官の金允基博士(71)は「韓半島の鉄道にはみな私の息がかかっているようなものですよ。日帝のときは全州駅、西平壤駅、南原駅、慶州駅などを韓国式につくるのが私の使命でしたから……」と回想している。

鉄道七十年とともに、人びとはこの鉄道を通して、ちようどトルストイの「アンナ・カレーニナ」のような悲劇的テーマを得、愛別離

だけに限定した儒教保守の社会を脱け出し、一九〇四年に開通、一九〇五年の新年には京城―草浪の京釜全区間にわたり運輸営業が開始されたことは、長い朝鮮社会の道路だけではなく、社会、文化、そして経済を大きく変えていった。その汽車の速度は在来の時間の概念である歳月を、ひと月から時間へと変えていった。

そして開化歌詞が新小説にと変化し、愛国歌の時代を終えたあと、国費留学生崔南善の「京釜鉄道歌」が、一九〇八年三月に発表された。これはこの国最初の唱歌形式のものとして記念すべきものである。彼は日本で流行していた「東京から下関まで……」の明治鉄道唱歌に刺激され、アイルランド民謡「麦畑」の曲にのせた叙事詩、長歌六十七節の鉄道啓蒙歌を作ったのである。

「私は文学者になる人ではないが、時代が私を文学者にした」といいながら、崔南善の新詩開拓が始まるが、この鉄道歌は、彼の啓蒙文学に先立つ業績でもあり、鉄道沿線の地理、風物まで紹介する開化の主題をあらわしている。崔南善自身は八・五調というが、趙芝薫は日本明治時代の唱歌新体定形詩の七・五調そのものであると語っている。

「音たかく 鳴りひびく 汽笛の音/南大門を背にして 走り出せば/それは あたかも 疾風のように/翼のある 鳥さえ 追いつけず」

「老いも 若きも 仲よく座り/われらも 外国人も ともに乗り/内外親善 みんなも 和やかに/小さい 別世界 ひろがるよう」の、「この『鉄道歌』は、そのあと『世界一周歌』から世界史、世界地理概観の知識を供給する雄壮な律調へと発展する。黄順元(作

苦の痛みと「旅愁の郷愁化」をおぼえるようになった。

いまはこの斜陽の鉄道に身を伏し、耳をつけ、消え去りし列車の音に聞かぬのみである。

## 鳳仙歌

垣根の下の 鳳仙花よ

君の姿 いじらし

ながい 夏の季節に

美しい 花咲くとき

麗わしの 乙女たち

君を 愛で 遊べり

いつしか 夏は去り

秋風 吹き寄せ

美しき 花ぶさ

無情にも むしばみ

花びらは落ち 枯れはてた

君の姿 いじらし

冬の雪 冷たい風に

君の姿 うち果てても

平和を 夢みる

君の魂 永遠に  
やわらかい 春風に  
甦えるを 願う

울 밑에 선 봉선화야  
네 모양이 처량하다  
길고 긴 날 여름철에  
아름답게 꽃 필 적에  
어여쁘신 아가씨들  
너를 반겨 놀았도다

어연간에 여름 가고  
가을바람 솔솔 불어  
아름다운 꽃송이를  
모질게도 칩노하니  
낙화로다 흩어졌다  
네 모양이 처량하다

북풍한설 찬 바람에  
네 형체가 없어져도  
평화로운 꿈을 꾸는  
너의 혼은 예 있었으니  
화창스러운 봄바람에  
회생기를 바라노라

歌「運動歌」を制定し、才能ある生徒たちをソウルへ招聘したとき  
彼も選ばれた。

そして彼は、漢陽の訓練院広場で開かれた春季大運動会で「大韓  
帝国の光武日月／富強安泰は 国民教育普及によるもの／運動のと  
きは体育に力をそそぎ／勉強するときは一生懸命やつて知識をつけ  
よう」を、曲調のない口号合唱にしている。ここから彼の音楽は始  
まったといえる。

一九一五年、朝鮮正楽專習所洋楽部で金仁湜教授と出会い、一九  
一八年日本の上野音楽学校で尹心憲たちと二年間授業を受けた。そ  
のとき彼は金祐鎮・尹心憲たちの同友会巡業演劇の台本「最後の握  
手」を書いた。一九二〇年彼は三・一運動直後の廢墟のような故郷  
へ帰り、小説「処女魂」を書いて出版する。そしてこの本に「哀愁」  
という譜面を載せた。

韓国西洋音楽の開化系譜ともいえる金仁湜・李尚俊・金永煥につ  
づく金亨俊（金元福の父）が、この曲に歌詞をつけたものがいわゆ  
る「鳳仙花」である。

本来、鳳仙花は望郷の念の花言葉をもっている。この国では九月  
十五日の夜、少女たちが鳳仙花の花で爪を赤く染め、翌年まで赤い  
きれいな爪をしているのが習わしである。これは高麗の進貴女が元  
の宮廷で伽倻琴の楽士をしているとき、望郷の念にかられた末に目  
が遠くなり、鳳仙花で爪を赤く染めて早く故国へ帰れるようお願いを  
たてたという伝説と、高麗の忠成王が元に人質になっていたとき、  
故国をなつかしんだという伝説からきたものである。

このような伝説が、すぐさま三・一運動直後の「失われた時代」

道は神聖である。道は人間を宗教的に昇華させる。水原西南へ單  
線の水仁線にそって、梅松村の入口から広がる野木平野で水仁線と  
別れ、京畿の地西南端に到着すると「ああ、ここまで来たのか」と  
遠隔感をおぼえる。

京畿道華城郡といえば富農の地である。それでもこの国の典型的  
な早春は、長い春窮期に飢えた処女の雰囲気をかもしだしている。  
高麗八道制三府時代の水原府以来、ここ南陽の旧跡は、ここから  
この国の西洋音楽の大家洪蘭坡が生まれたこと以外は何も残ってい  
ない。

彼の故郷である華城郡南陽面割草里は、西海の海岸ぞいにある。  
対岸の忠南当津が、長いあいだ中国との交易港だったように、ここ  
も中国と接触したあとがある。南陽、西新の臨海地帯には、実際に  
唐城が残っている。

割草村スホ山の、峰ごとに柿の木の多いふもとに、蘭坡の五代目  
の祖である中枢府使の墓があり、南陽洪氏は村の八十六戸のうち七  
十六戸を占めている宗地でもある。彼はここで韓末の夜学のような  
培養学校に通い、そして漢陽（ソウル）へ上京している。

一八九七年に生まれ、十五歳になってからYMCAの中学部を卒  
業したのだから、故郷の彼の生家に住んでいる張吉鎬老人(67)のい  
うとおり、六、七歳のときソウルへ行ったことになる。

「私の兄の張鳳鎬と同じ年です。彼の父もそうですが兄も酒豪で  
した」と昔を述懐している。

蘭坡洪永厚（族譜には泳厚）は、故郷の培養学校がその学校の唱

に、哀愁の「鳳仙花」にのって、全国を吹きまわったのである。二  
万五千人の虐殺、五万人の人間が投獄され、山野が血に染まった一  
九一九年の春から秋にかけての悲劇と、五百万同胞の万歳の声を、  
ひとつの悲しい歌曲に集約させたのである。もともと悲痛な絶句が、  
もともと女性的な哀愁に昇華するということは、東学革命の「青鳥」  
でも実証されている。

ながいこの国の情恨は、すべて韓民族の感情を代表している。「恨  
の多き」という言葉が慣用されるのもそのためである。そこには依  
存者の諦念、女性的な消極、悲哀の自己同一性がこもっている。

しかしこの「恨」のもとの意味は詛呪、恐ろしいほどの憎悪をあ  
らわす感情である。それは古代北方流民の普遍的な生活感情である  
が、彼らが韓半島に定着しながら大陸をなつかしむ郷愁へと変って  
いったものである。それはもう一度その郷愁が女性的に弱化したあ  
と、韓半島試練史を通じて、典型的な被害者の感情へと転落してい  
った。

しかしこの国では、この「恨」こそが、この国を守ってきた深い  
未亡人的な意地となっているし、この「恨」なくしては、何も創造  
できないものになっている。

洪蘭坡の天才的な歌曲「鳳仙花」が三・一運動という民族復元の  
抗争直後に全国を吹きまわったのも、このような恨を、その歌が、  
「恨」の系統に発展させたためである。特に「垣根の下の 鳳仙花  
よ……」いつしか 夏は去り……」の一、二節あとに「冬の雪 冷  
たい風に／君の姿 うち果てても／平和を 夢みる／君の魂 永遠  
に／やわらかい 春風に／甦えるを 願う」がソプラノ歌手金天愛

の狂うほどの悲歌唱法でうたわれたとき、それが一九四〇年代の日帝末期の社会で、あまりにもはやりだしたので、日本の警察はレコード発売禁止、歌の禁止処分を下した。

「金亨俊先生が住んでいらした家には、鳳仙花がいっぱい咲いていて、われらはまさにあの鳳仙花のようだといつもおっしゃっていました」と、金天愛はいつている。

多くの植民地時代の芸術家が、親日家に変質していったときでも、洪蘭坡は彼の多様な悲恋の痛みをかかえたまま、この国を守る民族的節操を守っていた。その当時の音楽家たちは、文学者たちが、民族意識の欠如した国際追従主義者の印象をともなう時代の現実だったから、彼のような孤高な民族意識と創造意識の一致は、記念碑的なものである。

彼はふたたび日本に行き、東京シンフォニーのバイオリン第一奏者となり、帰国して中央学校の教師、研楽会創設、朝鮮音協幹部、演奏活動を経て、アメリカのシャーウッド音大の研究生活、梨花専門学校（いまの梨花女子大）の講師、京城保育教授、京城放送管絃楽団創設などの華麗な業績を残しながら、民族情緒あふれる多くの名曲を生み出した。

そして彼は解放をみずして一九四一年病死し、墓は高陽郡漢芝面製泰院にある。

京畿道水原市では、この民族音楽家洪蘭坡を記念して、蘭坡音楽祭がすでに六回開かれている。

八達山には彼の歌碑が建てられ、その少年たちを蘭坡音楽の雰囲気になじませている。

ひとつの曲が短命に終わらず、ながいあいだうたわれるということは、その曲が持っているこの民族の根源的な情緒のためである。この歌で別れる愛人に身も心も捧げる愛の終わりを愛し、この歌で生きる苦しみをわかち合い、この永遠な国民的標題の歌で失われた国を探し求めたのである。

いかなる大状況、いかなる大規模な「生」のなかにも、かならずその真髓としての詩的な悲しみがある。英雄と大陸、そして民族の實質は、それを明らかにしたとき「鳳仙花」のような哀しくも美しい、ひとりの処女のエレジーになる。

おそらく朝鮮朝以後、この国には義と不義の歴史はあっても、愛の歴史はなかったようである。韓末日帝時代は、人は義の規範と不義の状況をあまりにも穿鑿したようである。申采浩、安昌浩の愛国も、それは愛というよりも義の概念である。

この義が累積された小乗社会を浄化させるひとつの女性的な歌「垣根の下の 鳳仙花……」がみせてくれる女性的な音形は、人びとに愛の美しさ、愛の悲しみをおのずと知らしめたのである。

ああ、われらに洪蘭坡がいなかったら、いかに暗澹たるものであったか。われらは、シューマン、シューベルトと同じような矜持を洪蘭坡に持つことができる。女学生も中年の女性も、酒場の女も、そして悲しい男も、この歌をうたいながらこの国の「生」をつくっていったのである。

編集部注・誌面の都合で「鳳仙花」の楽譜は次号に掲載します。

## ある小作人の陳述

—『マン』一九八〇年十二月号—

トンバイ・トンパウ

「このかごに入った卵はだれのかしら」この家の主婦が台所から大声でたずねる。

「かご？ ああそれだったらうちのだよ。ほらあのポートンから来たおじさんが持ってきてくれたものだ」私も大声で答える。

「おじさんでどのおじさんよ？ ポートンに親戚なんていたかしら」よく通る声で質問は続く。

「ほら、この間私に会いに来たおじさんがいただろう。今朝請願書を取りに来た時に置いて行ったものだよ」と私は答える。

「何もいらない、何も持つてくるなど言った

のに……。何も差しあげるものがないので、せめて卵でも、と言つて持つて来てくれたものだ」私は嘆くように語った。

タイ人のこういう人情の厚さに私は心を打たれる。

私は坐つて、つい一週間ほど前三人の男たちが私を事務所にたずねて来たときのことを思い出していた。

「ごめんください。トンバイ・トンパウさんはいらつしやいますか」

「はい、私がトンバイですが」私は三人を招じ入れ椅子をすすめた。

「すいません存じあげなくて、お名前だけは知っておりましたが」三人のうちの一人が話し始める。「私はバンコクの者ですが、親類

のセーン伯父はポートンの者で、今大変な苦境に陥つてしまい誰もどうしてよいのやら分らず、こうしてトンバイさんに、ごめいわくとは思いますが御相談に寄つたわけです」

「めいわくなどということはありませんよ。私にできることがあつたら言つてください。私たちはみな親子兄弟みたいなもので、一人が苦しんでいたら他の者もじつとしてはいられません」

「ありがとうございます。さあ、おじさんお話しして」そう促されたそのおじさんは年の頃五十すぎの農夫だった。

「話っていうのはこんなわけです。裁判所から令状が来てわしらの家を競売にするってんでこの八月二十八日と決めて来たわけ。いったいどうしたらいいものやら……」彼は重い口をひらいた。

「どういうわけで裁判所はあなたの家を競売にすることにしたのですか」原因が理解できないので私はこうたずねました。

「つまりわしとこの小作料がどこおつているんで起訴されたようなわけです。裁判所は証人調べもしないで判決を出したんですよ。わたしは弁明したのにぜんぜんきいてもらえないで、家をとっておさえて競売にして、それで小作料を払う、と決められちまったわけ……」

「裁判所が耳を貸さないというのは解せないですが、いったいどんな風な弁論書を出したんですか。弁論書を提出すると裁判所はそれを受けて証人尋問を原告と被告の前で行なつてそれから判決を出すのです。証人尋問もしないで判決を出すことはありませんよ」私は分りやすく説明した。

「わたしの場合はきいてもらえなかつたですよ。これが私が提出した弁論書ですが裁判所は受けとらなかつた」

彼はこういいながらノートから破りとった紙に大きなたどたどしい字を書き綴つたものを私の前に出した。

「これはだめだ、裁判所の書式にのつとつて書かなければ」

「書式だかんだかそんなものはわたしには分りません。わたしはこの紙を裁判所に持つて行つたのですが、受けとつてくれないのでどうしたらいいのかわらなかつたのです」彼は希望を失つた人のように口をつぐんだ。

私はそこでその紙、彼の弁論書を読んだ。それは以下のようなものである。

### 3

「裁判所の御厚情により分割払いを認めていただけるよう御配慮をお願い申します。原告が私に小作を続けることを許してくださいならば、五年以内に全部払い終ります。もし原告がこれ以上小作を続けることを許さない場合は、払い終るまで毎年最低二〇〇パーツずつ支払います。被告には自分の田がありませんから小作しなければならず、その上支払わねばならないかかりが多いのです。なぜなら私の妻と息子は病気で働けないからです。し

たがって被告は自分一人で田を作らねばなりません。被告の住んでいる家も被告のもではありません。それで裁判所の暖かい御処置をお願い申し上げる次第です。

この件の経緯を申し述べると、被告はすでに小作料の半分以上である三ガウイアン(米を測る単位で一ガウイアンは一〇〇タン、一タンは二〇リットル)を原告に支払つております(小作料は五ガウイアン七〇タンという契約)。これについて被告には以下の証人がおります。

- 1、村長
- 2、小作地管理官
- 3、目撃者である近所の住人

被告の収穫について報告いたしますと、種れだか六〇〇タン余り(六ガウイアン)で以下のように支払いました。

- 1、小作料に三〇〇タン
- 2、ポンプ用のオイル代に二五〇タン
- 3、肥料代に五〇タン

以上合計して六〇〇タンになります。この他にあと五〇タン残つた分を被告の家族五人のための食いぶちにあてますがもちろん足りないため、他から借りて回らねばなりません。これもまた被告の負債となつてついで

てまわるため原告に小作料の全額を支払うことができません。これは被告側証人に証言してもらふことができる事実であります。

裁判所の御配慮をお願い申し上げます。

「私が今まで読んだことのある弁論書の中でもっとも素晴らしいものですよ。心から真実を語っている……しかし……」私はつらい気持ちからのどがかわれた。

「しかし裁判所の様式によつていない」

### 4

私は原告の訴状を読んだ。

「原告は二区画で二六ライ(一ライ一六〇〇平方メートル)二ガーン(一ガーン四分の一ライ)三一ワー(一ワー二メートル)の土地を所有しており、十九年前から被告にこの二区画の土地を小作させてきた。一九七八年三月一日原告は被告と契約をかわし、向う二年間小作を続けること、一九八〇年の収穫時に小作を終了すること、被告は小作料として毎年五七〇タンの粃米を原告に支払うことをとり決めた。一九八〇年の収穫時すなわち二月に原告は小作料のとりたてを行なつたが、被告は三〇〇タンを払つたのみで残りの

二七〇タンについては雨が少なくて収穫が少なかつたことを理由に払おうとはしなかつた。原告はなおも支払いを催促したが、被告は支払いの意志がなくなかつて原告に裁判に訴えるようにと挑発した。

粃米の売買価格は一タン三四パーツであるから、被告は二七〇タンすなわち九一八〇パーツを支払わねばならない。

被告の行為は原告に損害を与えており、したがって原告は被告をここに告訴する次第である。裁判所が被告に命じて滞納小作料九一八〇パーツと、訴訟税及び弁護士料を全額原告に代つて支払わせていただきたくお願い申し上げます。

「おじさんは十九年もこの土地を小作してきて何も残らなかつたのですか。何かいくらかでも良くなつたことはないのですか」私は救いようのない気持ちにおそれながらこうたずねた。

「何も良くなりやしません。借金がふえるばかりだ。弁論書に書いたとおりで。うちで食べる分だつて足りない。毎年借りてくる有様で。でも小作料は全額払われる。払わないと小作させてくれないから、収穫が終るとまず地主に払う分をとり分けて残つた分

は信用買ひしておいた油代、肥料代、米代おがず代なんか全部払つてしまふ。結局借金を全部返してまた次の分を借りる。こんな風にずっと続いてきているわけなんですよ」

「十九年もそんな有様でその上二十一年目には住む家を競売されて滞納小作料を払わされるというのじゃあ、これからどこに住むつもりですか」私は自分を擲擲するようにつぶやいた。

セーン・ポートン氏は真意をはかりかねて私の顔を見やつた。

「二十一年目は家もないですよ。裁判所が令状で競売にすると決めてしまつていゝるんですから」彼を案内してきた男が口をはさんだ。

### 5

私はポートン地方裁判所による財産競売宣告に目を通して見た。

「競売物件。」

家屋、住所記載なし。一階建て。二部屋。周囲を縁側が囲んでおり、間口三ワー、奥ゆき約四ワー程ある。木造、屋根および側面はニツパ椰子、室内および縁側の床は板の全面張り、中心の柱は角柱、他の柱は円柱。ポート



イン県ポートン郡マサック村第四集落内サ  
ムレット氏敷地内に建てられたもの」

私はいつそうつらい気持ちにおそれられこうた  
ずねた。

「家も他人の土地に建ててあるんですね？」  
私の声もつぶやくように低くなった。

「そうなのです。その人の土地に建てさせて  
もらっている上、建てる費用も借りています。  
建てる時には十分な収穫があれば木材費もセ  
メント代も払えると思いましたが、収穫があ  
がらないので、材木屋のだんなに訴えられて  
それでもまだ借金して支払ったわけです。現在  
でもまだ材木屋の借りが払い終わってないよう  
な状態なのです」

「建築費がまだ払い終わっていないのにさし  
おさえられてしまったのですね」

「はい」彼は沈んだ声で答えた。その顔に  
は悲痛な色がありありと浮んでおり、いっしょに  
いたわれわれすべての心をも救いようのない暗  
さで満たしたのだった。

これがポートン郡から来たセーン・ポー  
トーン氏すなわちあのかご入り卵の贈り主に  
かんする顛末である。いかに貧しくとも心は  
貧しくはない、これがタイ人なのである。

### 編集後記

「ポートン人であることは、偉大な苦難に  
属することだ」

第二次世界大戦中、破壊されたワルシャワ  
に焦点をあわせ、そこから現在、獄中で健康  
をあやぶまれている高銀のことをかんがえる。  
国土が分断され、詩や音楽が禁止されても、  
敗北のどん底から出発する抵抗の文化がある。  
パルチザンのかえ歌からシヨパンまで、また  
は、「プリバ」から尹伊桑の音楽まで。

\*

いままでのレパートリーから十四曲をえら  
んで、水牛楽団のカセット・テープを発売し  
ます。

A面——人と水牛/白いハト/雨をまつイ  
ネ/もうひとつのバナナング(戸島美喜夫)  
/祖国/不屈の民

B面——プリバ/その時その人/時がくれ  
ば(金大中・詞)/キド(木島始・詩)/め  
しは天(金芝河・詩)/ヨネの宣言/百姓は  
草/管制塔の歌

歌詞カード付 定価二千円 送料二百四十円  
申込みは、編集委員会まで。

### 購読の御案内

\*本誌は書店にはおきません。毎号確実  
に入手されるためには編集部あて予約購  
読の申し込みをしてください。発刊と同  
時に直送します。

\*申し込みと送金は郵便振替(口座名  
水牛編集委員会、口座番号東京四一九一  
七九二)または現金書留でお願いします。  
住所、氏名、電話番号、何号からという  
ことを明記してください。

\*購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、  
半年分一八〇〇円です。

### 水牛通信 第三巻第四号

一九八一年四月十日発行

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-13

八巻方

電話〇三(四二五) 九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントショップ